■ 梶哲夫教授・横山十四男教授の御退官にあたって ■

心からの感謝をこめて

篠 原 昭 雄

梶哲夫先生と横山十四男先生が，1989年の3月31日をもって筑波大学を定年で御退官になられます。いずれこの日のくることは分かっていることですが，いざ近づいてくると本学会にとってかかせない両先生をお送りすることは，まことに惜しまれてなりません。筑波大学社会科教育学会は，1982年（昭和57年）に発足し，7年が経ちました。その間，定期的な例会，大会，機関誌『筑波社会科研究』や会報の発行など学会活動の内容も充実してきていますが，両先生は，学会発足時からその発展・充実に尽されてまいりました。まさに本学会の生みの親，育ての親であり，私たちの最良の指導者でありました。

梶哲夫先生は，筑波大学が創設される前には，東京教育大学附属中学校・高等学校や東京教育大学教育学部で社会科教育を講じておられ，その間，文部省の教科調査官として昭和40年代版中・高等学校社会科の学習指導要領作成に携わられ，特に中学校公民的分野の設定に主導的な役割を果たされました。こうして本学の社会科教育だけでなく，我が国の中等社会科教育の発展に幾多の貢献をなされてきました。また，本学に関しては，筑波大学の創設に尽され，筑波に移られてからは，大学院修士課程教育研究科の新設に参画され，とりわけ教科教育専攻における社会科教育コースの設立とその基礎を構築されるとともに，その発展に力を注がれました。

本学会は，東京教育大学教育学部の社会科教育学教室の伝統を引き継ぎ，昭和54年に発足した大学院修士課程教育研究科社会科教育コースの成立を契機として結成されました。それは，現場の教育と大学院とを太い絆で結び新時代の社会科教育を育てることが目指されたものでした。梶先生は，全国的には日本教育学会理事や日本社会科教育学会会長などの要職を務めながら，筑社学については当初からその充実に尽されてきました。また，昭和58年5月の例会では「現代社会」の指導計画と実践に関するご指導をいただいており，今回の教育課程改訂における社会科，特に高校社会科の在り方については，社会科教育研究者として，本学会のとるべき道を熱心に説かれています。

横山十四男先生もまた，本学会結成当時から多くの貢献をなされました。学会全体を通しての理論的指導は言うまでもありませんが，1985年『筑波社会科研究』第4号には，吉田・上笹両先生とともに，論文「ふるさと意識に関する調査」を掲載しており，1987年の同誌第6号には，「歴史学と歴史教育」の研究報告を行うなど，会員の研究・実践に種々の示唆を与えてくださってい

ます。横山先生は，昭和31年から約24年間に亘って東京教育大学附属中学校・高等学校において社会科教育の実践と研究に携わってこられました。当時から社会科・歴史教育に関する幾多の業績を挙げられ，それらは我が国の社会科教育の発展に大きく貢献されています。その後，筑波大学に移られ社会科教育の研究と指導に当たってこられましたが，先生の研究指導にはこのような高く豊かな実践・研究に裏づけられた社会科・歴史教育論があります。まさに筑波大学の歴史教育に一時代を築かれたのであります。先生の学位論文「義民伝承の研究」もその一つの現われであると思います。

また，日本社会科教育学会の幹事として全国的な教育研究の責任者を務められるとともに，昭和61年度からは本学会の会長として筑波大学の社会科教育の発展に力を注いでくださいました。

両先生とも，このように日本の社会科教育40年の歩みとともに幾多の実践や研究の業績を挙げられ，その発展・充実に貢献してこられた，いわば社会科教育学の泰斗であります。と同時に研究指導には，厳しさと温かさが溢れており，私たちの得がたい師でもあります。

ご存知のように毎週金曜日には，夕方5時から筑社学の幹事会が開かれます。そこでは，例会，大会，機関誌，会報などの運営全般についての打ち合わせや時の社会科教育の課題が話し合われます。その席にいつも両先生のお姿がみられることも私にとっては驚きでした。両先生が，いかに筑社学を愛し，筑社学と共に歩んできたか，本学会にかける情熱の一端が伺われるように思われました。両先生の院生諸君に対する愛情はまことに深く，教育指導における深い造詣とともに各人の進路や将来を思いやる姿勢には敬慕の念を抱かずにはいられませんでした。

社会科教育は，特に高校社会科をはじめとして，いま大きな転換期を迎えています。その抱える課題も数多くあります。新しい社会科に対応する本学社会科教育の在り方も更に重要な課題になっています。その折に両先生が御退官されることは，私たちにとって大きな支えを失するように思えます。しかし，本学の社会科教育コースと筑社学は，両先生がいつも言われるように，全国の社会科教育においても主導的立場にあります。両先生の後を引き継ぐ私たちが，力を合わせて，本学社会科教育・筑社学の発展を図らなければなりません。それこそ両先生の御恩に報いる第一の方途と私は考えます。

梶哲夫先生，横山十四男先生，長い間本当に有難うございました。御退官後も私たちの学会の一員であることには変わりないと思いますが，今後とも本学会の発展と私どもの指導にお力を賜りますようお願いいたします。

会員一同とともに，心からの感謝をこめてお礼を申し上げるとともに，御健勝と御多幸をお祈り申し上げます。（昭和63.12.10）

（筑波大学教育学系）